

令和6年度 みやぎ震災伝承連携推進事業補助金 採択事業

地域住民と行政が復旧・復興期を乗り越えた術（すべ）を活かし、伝えるプロジェクト



H.simple Design Studio 合同会社

【事業概要】

震災復旧／復興期における地域住民と行政のやりとりについて、仙台中野地区の住民が組織した「中野小学校区災害対策委員会」（後の「なかの伝承の丘保存会」）の方々および当時の**仙台市担当職員**から聞き取りを行い、その「過程」と時々「感情／思い」を丁寧に掘り起こし、記録して伝承する。

上記の作業を始めるにあたり、いま復旧／復興に取り組まれている**能登半島地震の被災地**へ調査に赴き、被災地域の住民と市町村担当職員から、その現状と課題をお聞きすることを通して、本事業で「**記録し伝えるべき経験**」を**特定**し、この事業の成果物に活かす。

能登半島での調査からは多くの知見を得られた。その中でも、住民と行政のやり取りの「過程」の裏にあった「**葛藤、悲しみ、疲弊感、それでもなぜ続けるのか**」という「感情／思い」の問題を中心に据え、能登の方々にお渡しすることを念頭においた。

この「感情／思い」の側面を、能登の方々に深く触れていただくために「**朗読劇**」の手法が最も適切と判断した。「**朗読劇**」を**制作／上演／収録／公開**する。収録した「朗読劇」はWeb配信し、宮城県内だけでなく、全国の関係者が閲覧できるようにする。

次年度以降に、仙台中野地区の元住民の方々と能登の方々を、当事者同士オンラインで繋ぎ、収録した朗読劇と一緒に鑑賞して座談会を開催することを検討している。

【事業実施期間】

9月～12月：能登半島への調査／整理、方針の再検討

1月～2月：仙台中野地区及び仙台市担当職員からの聞き取り

2月：テキスト作成

3月：朗読劇稽古

3月27日：朗読劇上演／収録

（年度内にWEB公開）



【メンバー／協力者】

コアメンバー：小山田陽、八巻寿文、佐藤敏行

八巻と佐藤は「せんだい3.11メモリアル交流館」の館長経験者であり、退任後も多くの震災伝承活動に携わっている。小山田は同館の施設整備と運営補助を含め、その他複数自治体の伝承施設にてハードとソフトの両面で震災伝承活動に従事している。

朗読劇制作／演出：高橋菜穂子（一般社団法人 東北えびす）

仙台市東部沿岸地域に伝わる言い伝えや、暮らしのエピソードなどを取材。仙台で活躍するベテラン俳優に加え、若い世代の有志も起用して、被災した土地の暮らしや風習を演劇の手法で表現する活動を行っており実績がある。本事業を深く理解したうえで、聞き取り段階からテキストを起し、キャスティングから演出まで表現のパートを担当。

なかの伝承の丘保存会

旧仙台市立中野小学校区を構成する4町内会の代表者が、震災発生から9日後に立ち上げた「中野小学校区災害対策委員会」（後に「中野小学校区復興対策委員会」と改称）を解散し「中野伝承の丘」が完成した2017年に発足した団体。慰霊祭や地域イベントを開催している。本事業における復旧／復興期の住民と行政との生々しいやり取りの当事者にあたる。

蒲生なかの郷愁館

旧中野小学校の正面、杜の都バイオマス発電所内に整備された「なかの伝承の丘保存会」が主体の震災伝承施設。本事業のコアメンバーである八巻と小山田などが展示の制作に引き続き運営・整備に協力している。本事業の拠点であり、朗読劇の上演／収録場所。



なかの伝承の丘



蒲生なかの郷愁館

【事業の様子- 1】 能登半島での調査

現在、復旧／復興に取り組んでいる能登の方々が「欲しい／役にたつ」と感じるものが、能登の方々のみならず、未来の被災者にとっても有用であると想定し、能登半島地震の被災者と関係自治体の職員からお話をお聞きし、「東日本大震災の経験」を能登の視点で考察することを試みた。

被災直後から現在に至るまで、様々なご苦労と課題をお聞きしたが、東日本大震災との災害状況や規模等の違いから、**具体的な技術等のアドバイスは難しい**と判断した。一方で、復旧／復興活動の中にある「葛藤、悲しみ、疲弊感、それでもなぜ続けるのか」という「感情／思い」の問題が共通することを確認した。

訪問地（お話をうかがった方々）

- ・七尾市中島町小牧集会所にて（町会長ご夫妻、NGO常駐職員 2 名）
- ・湯宿さか本にて（坂本菜の花：湯宿主人、珠洲市職員 1 名）
- ・あみだ湯にて（新谷健太：あみだ湯運営、珠洲市職員 1 名）
- ・七尾市役所にて（七尾市職員 1 名）

現地案内人

- ・鹿野桃香（『地震日記』著者、珠洲より二次避難で金沢在中）
- ・東川清文（金沢市民芸術村ドラマ工房ディレクター、劇団演芸列車東西本線主宰）



能登半島被災地：七尾市中島町小牧での聞き取り



能登半島被災地：あみだ湯での聞き取り

【事業の様子- 2】 仙台での聞き取り／掘り起こし

なかの伝承の丘保存会役員（元「中野小学校区災害対策委員会」及び「中野小学校区復興対策委員会」役員）は、住民を代表して行政とのやり取りを続けた当事者であり、**103回の議事録を保管**していた。

この膨大な量の議事録を下敷きに、**保存会役員の方々と当時の行政担当職員**とが相互のやり取りを続けた「過程」とその時々「感情／思い」を、複数回に分けて聞き取りをした。

対象とした期間は、能登の方々からの聞き取り結果を踏まえて、**防災集団移転について行政とのやり取りを続けた期間**を対象とした。中野地区の方々にとっては、希望した移転地を「勝ち取ることができなかった」結果であり、決して満足ではなくとも、**それぞれが納得して受け入れるまでの経緯**などについて、詳しくお話いただいた。

実施した聞き取り会

- ・ 2024. 12. 18 なかの伝承の丘保存会 代表 4 名
- ・ 2025. 2. 2 なかの伝承の丘保存会 総会にて約20名
- ・ 2025. 2. 4 なかの伝承の丘保存会 代表 4 名
- ・ 2025. 2. 5 仙台市職員（当時） 1 名
- ・ 2025. 2. 14 なかの伝承の丘保存会 代表 4 名
- ・ 2025. 2. 18 仙台市宮城野区職員（当時） 1 名



「なかの伝承の丘保存会」からの聞き取り



「なかの伝承の丘保存会」総会にて聞き取り

【事業の様子-3】 朗読劇の制作／上演／収録／公開

仙台中野地区の関係者（住民と行政）への聞き取りは、当時のやり取りの「過程」と、その裏側にあった関係者それぞれの「感情／思い」に関する部分まで掘り下げることができた。

能登の方々へお届けする「朗読劇」の制作・演出に当たっては、（一社）東北えびすの高橋菜穂子氏のご協力を得ながら進めている。取材で聞き取った内容を極力活かし過度な演出は加えず、できるだけ忠実かつ伝わりやすいよう、適宜チェロの生演奏を差し込み、最後は中野小学校校歌で終演する。配役は当事者をイメージしたベテラン俳優。

今後のスケジュール

- ・ 2025. 3. 19 舞台稽古（1回目）
- ・ 2025. 3. 21 舞台稽古（2回目）
- ・ 2025. 3. 26 舞台稽古（3回目）
- ・ 2025. 3. 27 上演・収録
- ・ 2025. 3. 30 WEB公開

次年度以降に、仙台中野地区の元住民の方々と能登の方々とオンラインで繋ぎ、収録した朗読劇と一緒に鑑賞／座談会を開催することを検討中。



上演予定会場：なもうなかの郷愁館



上演予定会場：なもうなかの郷愁館

【事業の成果】

①住民と行政のやり取り、その「感情／思い」の記録と伝承

様々な伝承すべき対象がある中で、被災者の「感情／思い」の問題については、ナイーブな問題でもあるためなかなか触れるのが難しい対象である。本事業では、深い信頼関係のもとでの聞き取りを通し、その生々しい記憶を記録し、伝承するための土台を準備することができた。取材をした「なかの伝承の丘保存会」の皆様には企画の趣旨を深くご理解いただき、辛い経験である当時を思い出しながらご協力いただいた。

②「東日本大震災」と「能登半島地震」の接続

他の災害地域へ伝えるべき「東日本大震災の経験（復旧／復興期）とは何か」を考えるにあたり、今まさに復旧／復興に取り組んでいる「能登半島地震」被災者のお話は大変参考になった。重なる部分とそうでない部分とはあるが、この事業を通して関わってくださった能登の方々との繋がりを活かすためにも、今後も継続していきたい。

③朗読劇の手法を用いた「伝承」の試み

伝承施設の展示手法には、映像やパネル展示など様々な手法があるが、被災者の「感情／思い」といった心の問題に深く触れるために、本事業では朗読劇の手法を試みた。もちろん小説／写真／映画などの表現手法で震災の記憶を伝えるものはこれまでも数多くあるが、震災伝承施設の伝承の手法として、もう一步踏み込んだ心の伝承の可能性が、まだあるのではないだろうか。

④多様な主体との連携

「なかの伝承の丘保存会」の前向きな協力により、住民と行政の生々しいやり取りという、これまでに触れることが難しかった部分に取り組むことができた。これは、震災伝承施設「蒲生なかの郷愁館」の制作にあたり、この地域の歴史や風土を詳細に調べ、その過程で「なかの伝承の丘保存会」の皆さんとの信頼関係が築けたことが大きかった。

また上演にあたっては「杜の都バイオマスエナジー」の全面的な協力のもと「蒲生なかの郷愁館」を使用させていただいたこと、そして仙台・宮城の演劇関係者等の理解を得て惜しめない協力をいただいたことにも感謝したい。

本事業の成果である「朗読劇」については、来年度以降に「蒲生なかの郷愁館」の展示室内において、何がしかの公開・発信を継続することを検討している。今回連携させていただいた各団体・個人とは、今後も様々な形で「震災伝承」の試みを一緒にできればと考えている。

⑤この事業で得られたこと

災害の種類も、被災した人の状況も、同じものは二つとない。東日本大震災の事例が能登半島地震の規模や状況に、必ずしも当てはらなないと考えた。しかし、救命救急期→混乱期→先を見据える時期、といったフェーズの変化は共通している。

また、被災者が苦悩する原因には、きれいごとでは済まない現実の問題が必ず張り付いている。安住の住処を得るための過程が大きな山場となる時期がある、ということが課題として浮き彫りになった。